

『正法眼藏抄』口語訳の試み

——仏性(五)——

伊藤秀憲

第六段

六祖示門人行昌云、無常者即仏性也、有常者即善惡一切諸法分別心也。

いわゆる六祖道の無常は、外道二乘等の測度にあらず。二乗外道の鼻祖鼻末、それ無常なりといへども、かれら窮尽すべからざるなり。しかあれば、無常のみづから無常を説著・行著・証著せむは、みな無常なるべし。今以現自身得度者、即現自身而為説法なり、これ仏性なり。さらに或現長法身、或現短法身なるべし。常聖これ無常なり、常凡これ無常なり。常凡聖ならむは、仏性なるべからず。小量の見なるべし、測度の管見なるべし。仏者小量身也、性者小量作也。このゆへに六祖道取す、無常者仏性也、常者未転なり。未転といふは、たとひ能断と変ずとも、たとひ所断と化すれども、かならずしも去來の蹤跡にかかはれず。ゆへに常なり。しかあれば、草木叢林の無常なる、すなはち仏性なり。人物身心の無常なる、これ仏性なり。国土山河の無常なる、これ仏性なるによりてなり。阿耨多羅三藐三菩提、仏性なるがゆへに無常なり。大般涅槃、これ無常なるがゆへに仏性なり。もうもろの二乘の小見、および經論師の三藏等は、この六祖の道を驚疑怖畏すべし。もし驚疑せんことは魔外の類なり。

聞此詞、行昌大ニ驚疑ス、仏性ハ常住物ナリ、
経ニモ爾被説レ之、善惡諸法分別心ハ無常法
也、今詞大ニ相違、由疑レ之、是ハ行昌

この「六祖の」ことばを聞いて、行昌は非常に驚き疑う。仏性は常住物（永遠不变なるもの）である。経にもそのように説かれている。「善惡諸法分別心」は無常法である。この「六祖の」ことばは、はなはだ經文と相違している。だからこ

ハ世間ノ無常常住等ヲ心得テ如レ此怖畏ス、
六祖ハ仏説真常ノ方ヨリ被レ仰、時ニ実^シ水火
ノ法トナレリ、驚疑尤有^ニ其謂^イ、但行昌今ノ
次第ヲ委^シ被^レ示之時^{タマサ}忽得悟ス、故ニ今ヨリ
ハ可^レ名^ニ志徹^ト被^レ仰キ、今御詞皆被^レ説^ニ真
無常^一也、六祖道ノ無常ハ、外道二乘等ノ不
可^ニ測^度^{シヤクタク}之条勿論也、二乘外道ノ鼻祖鼻末
ソレ無常ナリト云ヘトモ、(一一九b)彼等不
可^ニ窮尽^{シヤクタク}云云、實仏性ノ方ヨリハ、モレタル
一法不可^レ有、但外道二乘等ハ、又此理ヲハ
不可^レ知故如^レ此被^レ釈也、又無常ノミツカラ
無常ヲ説著行著証著セムハ、皆無常ナルヘシ
云云、今ノ六祖ノ無常者即仏性也、有常者即一
切善惡諸法分別心也ト被^レ仰、則無常ノミツ
カラヲ説著行著証著スルスカタナリ、六祖不
可^レ遁^シ無常^{カカル}道理也、故如^レ此被^レ説也、又今
以現自身得度者、即現自身而為説法ナリ、コ
レ仏性ナリ云云、觀音ノ三十三身ナムトヲ変
給ハ、イカニモ能変(一一〇a)ノ身所化ノ
身各別ナルヘシ、是ハシカアルヘカラス、只
今以現自身得度者、即現自身而為説法也、是
則無常ノミツカラ無常ヲ説著行著証著スル同
義ナリ、又サラニ或現長法身、或現短法身ナ
ルヘシト云云、實於^ニ仏性ノ上^{カカル}談セム時ノ長法
身短法身更不^レ可^レ拘^ニ長短ノ義^ニ、以^ニ仏性^一或

れを疑うのである。これは、行昌は世間「で説くところ」の「意味に」無常・常
住等を理解して、このようにおそれるのである。六祖は、仏が説く真常の方より
おっしゃったのである。その時には、「常と真常とは」全く水と火のように相い
反するものとなってしまう。驚き疑うのは特にそれだけの理由がある。ただし、
行昌は、「六祖より」今の次第をくわしく示された時に、たちまち悟りを得た(徹
した)。だから「六祖は行昌に」、「今からは志徹と名のりなさい」とおっしゃつ
たのである。⁽⁷⁾ここのおことばは、すべて真無常を説かれたのである。「六祖道(言
う)の無常は、外道二乘等」が「測度」する(推しはかる)ことのできないことは勿
論である。「二乘外道の鼻祖鼻末(祖とその末孫)、それ無常なりといへども、かれ
ら窮尽すべからざ「るなり」とある。全く、仏性の方からすれば、もれた一法
などあるはずがない。しかしながら、「外道二乘等」は、特にこの理を知ること
ができないから、このように釈かれるのである。それから、「無常のみづから無
常を説著・行著・証著せむは、みな無常なるべし」とある。この、六祖が「無常
者即仏性也、有常者即善惡一切諸法分別心也」(無常は即ち仏性なり、有常は即ち善
惡一切諸法分別心なり)とおっしゃった「おことば」は、そのまま無常が自らを「説
著・行著・証著」するすがたである。六祖「のことば」は、無常を遁れることが
できない道理「を示したの」である。だからこのように説かれたのである。また
「今以現自身得度者、即現自身而為説法(今、自身を現ずるを以て得度すべき者には、
即ち自身を現じて而も為に説法す)なり、これ仏性なり」とある。觀音が三十三身
などにすがたを変えられることは、どうみても、能変の身と所化の身がそれぞれ
別であるはずである。「しかし」これはそうであつてはいけない。ただ「今以現
自身得度者、即現自身而為説法」である。これはそのまま「無常のみづから無常

時談ニ長法身、或時談ニ短法身、不可ニ有ニ相違、常聖コレ無常也、常凡コレ無常也云云、仏性ノ方ヨリハ常聖常凡皆無常也、常聖ハ断惑証理ノ方（一一〇b）是ハトルヘシ、常凡ハ愚鈍凡夫可レ捨ナムト心得ムニハ、背ニ仏性ヘシ、故常凡聖ナラムハ、仏性ナルヘカラスト被レ嫌也、是ハ日來我等カ思付タル善惡ノ常聖常凡ノ定ニ心得ハ不可レ云ニ仏性ニト被レ嫌也、実小量ノ見ナルヘシ、測度ノ管見ナルヘシト被レ嫌、尤有其謂、仏者小量身也、性者小量作也ト被レ嫌、是ハ常聖常凡ハ如ニ我等見解一談セム時ノ仏性ノ様ヲ、如レ此ワケテ皆被レ嫌也、又六祖道取ス、無常者仏性也、常者未転也ト云云、此未転ノ詞本公按ニモ不レ見、（一一一a）フトサシ出テ難ニ心得ニ様ニ聞ユ、然而無常者仏性也ノ道理、實未転ナルヘシ、随未転ト云ハトテ、タトヒ能断ト変ストモ、タトヒ所断ト化ストモ、必シモ去來ノ蹤跡ニカカハレス、ニヘニ常也云云、所詮能断所断ト談ストモ去來ニカカワラス、此道理ヲ未転ト心得ル不可ニ相違歟、草木森林人物身心乃至国土山河皆仏性ナル条勿論事也、阿耨多羅三藐三菩提仏性ナルカ故ニ無常也、大般涅槃是無常也云云、是皆如レ文可ニ心得、此道理ニ乘ノ小見經論師（一一一b）等可驚疑

を説著・行著・証著」すると同じ意味である。⁽⁸⁾また「さらに或現長法身、或現短法身（或いは長法身を現じ、或いは短法身を現す）なるべし」とある。實に仏法について説くときの「長法身」「短法身」であつて、決して長短の意味に關わるはずがない。仏性を、あるときは「長法身」と説き、あるときは「短法身」と説くのであって、相違があるはずがない。「常聖これ無常なり、常凡これ無常なり」とある。仏性の方からは、「常聖」（常住の聖者）「常凡」（常住の凡夫）はすべて無常である。「常聖」は断惑証理の方であつて、これはとるべきである。「常凡」は愚鈍の凡夫「であつて」捨てるべきであるなどと理解する時は、ここ「で説くところ」の仏性「の意味」にそむくであろう。だから「常凡聖ならむは、仏性なるべからず」と斥けられるのである。これは日頃我々が考えている善惡の「常聖」⁽⁹⁾のよう理解するのは、仏性と言うべきでないと斥けられるのである。全く「常凡」のよう理解するのは、仏性と言うべきでないと斥けられるのである。全く「小量の見なるべし、測度の管見なるべし」と斥けられる。特にその「よう」に斥けられる理由がある。「仏者小量身也、性者小量作也」と斥けられる。これは、「常聖」「常凡」は、我々の見解のように説くときの仏性の様を、このように分けて皆斥けられるのである。また「六祖道取ス、無常者仏性也、常者未転なり」とある。この「未転」のことばは、もとの公按にも見えない。突然ふと出てきて、理解しがたいように思われる。そうではあるが、「無常者〔即〕仏性也」の道理が、實に「未転」であろう。したがつて、「未転といふは」とあつて、「たどひ能断と變ずとも、たどひ所断と化すれども、かならずしも去來の蹤跡にかかれず。ゆへに常なり」とある。結局「能断」「所断」と説いても、「去來」に關わらない。この道理を「未転」と理解するのは相違しないだろう。「草木叢林」「人物身心」乃至「国土山河」が皆仏性であるのは勿論のことである。「阿耨多羅三

条勿論事也、イカニモ無常ヲ仏性ト談スル儀、
教家ニハ実ニモ不レ有事也、非ニ祖門直指一
者難レ談義也、

(10)

今ノ行昌者俗名也、姓ハ張也、神秀弟子ニ被
語テ、神秀ヲ六祖ト号セム科ニ、忽ニ六祖ヲ
欲レ奉レ害トシタリシ人也、行ニ六祖菴、行昌刃
ヲノヘテ忽欲レ奉レ害時、六祖被レ仰曰、汝以レ邪
欲レ犯レ正イカニモ不レ可レ被レ害、但汝ニ金ヲ
十両負タリシ、其故如レ此セラルルカ、命ヲ
ハ不レ負故不可レ被レ害、忽金ヲ返トテ頸ヲ述
テ害セサセム(一二二-a)トシ給テ刃ヲアツ
ルニ更不レ切、此時六祖サレハコソ云ツレ、
更不レ可レ被レ犯、寺僧等聞ナハ忽汝可レ被殺
害、速ニ夜中ニ可レ帰之由被示、此時行昌帰
路ニテ今所行ヲアマリニ悲ヒテ悶絶ス、如レ死、
蘇生シテ後、道ニテ出家シテ、經ニ兩三年後
又參ニ六祖、今ノ仏性ノ問答等ハアリケリ、

\有仏性無仏性ト談シテ、此有無世間ノ有無ニ
非サル事ハ已事旧ヌ、其上ハ今ノ無常ノ無モ、
有常ノ有モ、共ニ仏法トモ可レ云カト覺タレ
トモ、無常ヲ仏性トタテ、有常ヲ(一二二-b)
この「行昌」は俗名である。姓は張である。神秀の弟子に頼まれて、神秀を六
祖と称させるために、すぐさま六祖を殺そうとした人物である。六祖の菴に行き、
行昌が刃を抜いですぐさま殺そうとした時、六祖は、「おまえは邪で正を犯そ
う」としている。なんとしても殺されることはできない。もしかしたら、おまえに金
を十両借りており「過去のことか」と、それゆえこのようにするのか。命を借りては
いないのだから、「私は」殺されることはできない。すぐさま金を返す」と言つ
て、「六祖は」頸をのばして殺させようとされた「後、行昌は六祖の頸に」刃を
あてたが全く切れない。この時六祖は、「だから言つた。決して犯されないと。
寺の僧たちが聞いたならば、すぐさまおまえは殺害されるにちがいない」と速く
夜のうちに帰るべきわけを示された。この時、行昌は、帰路でこの行ないをあま
りに悲しんで悶絶した。死んだようであった。生き返った後、仏道によつて出家
して、二、三年を経て後、再び六祖に参じた。この仏性の問答等は、「その時」
あつたのである。

\有仏性・無仏性と説いて、この有無は世間「で説くところ」の有無ではないこと
は、すでに言いふるされた。そうであるからには、この「無常」の無も、「有常」
の有も、共に仏法と言らるべきかと思われたけれども、「無常」を「仏性」とたて、
「有常」を「分別心」と「して」それぞれ別個であるとする。これがこの段の結

分別心ト各別ス、是此段ノ詮ニテアルヘキ也、真与レ邪ヲ分別ノ為歟無常トトクモ差別アルヘシ、二乗モ外道モ各ル也、外道ハ常ト計ス、又無常トモ計ス二乗モ外道モ各此性モ世間ニ談スル性ニハアラス、世間ニハイマタアラハレサル所ヲ性トイヒ、現シタルスカタヲ相トトク、隨^{シカ}会テ或仏性トトキ、或真如トトキ、或実相トトク、今イフ見性成仏ノ性ハ、今ノ仏性ニアタルヘシ、

行昌云、弟子嘗覽⁽¹³⁾涅槃經、未^タ曉^{ナトト}常無常義、乞和尚^{六祖大鑒禪師}慈悲略為宣說。」此問如^レ詞無別子細（一二三-a）

論であるはずである（「真と邪とを區別するためか」）。「無常」と説いても相違があるはすである。二乗にも外道にもそれぞれ「無常」のことばはあるけれども、「その」教えに随つてまた相違がある（二乗は無常を執するのである。外道は常と考え、また無常とも考える）。今の宗門で見性成仏と説く。この性も世間で説く性ではない。世間では、まだ現われないところを性と言い、現われたすがたを相と説く。会得にしたがつて或いは仏性と説き、或いは真如と説き、或いは実相と説く。今いう見性成仏の性は、この仏性にあたるはずである。

祖曰、無常即仏性也、有常者即善惡一切諸法分別心也、

此詞又別ニ可^レ了見^二子細不可^レ有、右所^レ載^{ヌスル}

ノ仏性ハ常住ノ法、善惡ノ諸法分別方ハ無常転変ノ法ト思フヲ、トリカヘタル詞ト覺ニ、タタシコレハ初重ノ了見ナリ、凡無常ニモ正見邪見アルヘシ、有常ニモ正見邪見アルトキニ、今ノ六祖ノ被^レ仰ル無常ヲモ世間ノ無常ノ如ク心得テハ無^レ詮、仏性ト心得トルトキハ山河大地日月星辰驢腮^{ヤイ}馬齧^シ皆^レ仏性也、14シカレハ無常ヲ心得ム（一二三-b）事モ是程

ヘ行昌云、「弟子嘗覽^ニ涅槃經、未^タ曉^{ナトト}常無常義。乞和尚^{六祖大鑒禪師}慈悲略為宣說。」（行昌云く、「弟子嘗^{むかし}涅槃經を覽しに、未だ常・無常の義を曉らず。乞う和尚慈悲をもつて略為に宣説しましませ。」）（この問はことばの如くであつて、別にとりたてて問題にすることはない）

「祖曰、「無常〔者〕即仏性也、有常者即善惡一切諸法分別心也。」（祖曰く、「無常は即ち仏性なり、有常は即ち善惡一切諸法分別心なり。」）

へこのことばには、また特別に思慮すべき理由はあるはずがない。右に載せたところの仏性は常住の法、善惡の諸法分別の方は無常転変の法と思うのを、「無常と常住とを」取り替えたことばと思われる。ただしこれは初重の考^{ル前}（『法華經』が説かれた以前の教え）である。凡夫が「説く」無常にも正見と邪見があるはずである。有常にも正見と邪見があるときに、この、六祖がおつしやる無常をも、世間「で言^ハうところ」の無常のように理解してはしようがない。仏性と理解するときは、山河大地・日月星辰・驢腮馬齧すべてが仏性である。そうだから、無常を理解することもこれほどであろう。正法眼藏第一現成公按の卷で、「風性

ナルヘシ、正法眼藏第一現成公按ニ、風性常住無處不周ノ事ヲ、麻浴山宝徹禪師ト僧ト問答ス、是モ風ト云ニ付テ扇ヲツカフソツカワヌソナムト云マテハ仏法ノアキラメト難^ハ云、仏家ノ風ハ大地ノ黄金ナルヲ現成セシメ、長河ノ蘇酪ヲ參熟セリト云、世間ノ風ノ如クニハ心得マシ、今ノ無常以同^レ前也、所詮何ノ詞モカヤウニ心得ヘケレハ、必コノ詞許ヲ例ト証拠ニ引ヘキニアラサレトモ、先小分ヲ挙ル也、

行昌曰、和尚ノ所説大違^(キニイヌ)經文^一也、(一二四a)此詞尤イハレタリ、行昌經文ノ義ニマトヘハ、祖言力違^ニ經文^一ト覺ユルナリ、

祖曰、吾伝^ニ仏心印^一、安^敢違^ニ於仏經^一、是又如^レ文、

行昌曰、經説^ニ仏性是常^一、和尚却言^ニ無常^一、善惡諸法乃至菩提心皆是無常^一、和尚却言^ニ是常^一、此即相違^ス。令^ニ學人轉加^ニ疑惑^一、是又行昌所存如^レ詞也、

常住、無處不周」のことを、麻浴山宝徹禪師と僧とが問答している。これも、風といふことに関する、扇を使う使わないというぐらいでは、仏法の明らめとは言い難い。「仏家の風は大地の黄金なるを現成せしめ、長河の蘇酪を參熟せり」とある。世間の風のようには理解してはいけない。この無常は先に同じである。結局のことばもこのように理解すべきであるから、必ずこのことばだけを例として証拠に引くべきではないけれども、まず一部分をあげたのである。

行昌曰、「和尚所説大違^(キニイヌ)經文^一也。」(行昌曰く、「和尚の所説大きに經文に違すなり。」)このことばは、特に理由がある。行昌は經文の意味に惑うから、六祖のことばが經文と違うと思うのである。

「祖曰、「吾伝^ニ仏心印^一、安^敢違^ニ於仏經^一。」(祖曰く、「吾れ仏心印を伝う。安んぞ敢て仏經に違わん。」)これもまた文の通りである。

「行昌曰、「經説^ニ仏性是常^一、和尚却言^ニ無常^一、善惡諸法乃至菩提心皆是無常^一、和尚却言^ニ是常^一、此即相違^ス。令^ニ學人轉加^ニ疑惑^一、是又行昌所存如^レ詞也、」(行昌曰く、「經には仏性是れ常なりと説く。和尚却言^ニ是常^一、此即相違^ス。令^ニ學人轉加^ニ疑惑^一、是又行昌所存如^レ詞也、」)これもまた、行昌の思つているところはことばの如くである。

「祖曰、「涅槃經吾昔者聽^ニ尼無尽藏讀誦一徧^一、便為講說。無^ニ一字一義不^レ合^ニ經文^一乃至為^レ汝終無^ニ二説^一。」(祖曰く、「涅槃經は吾れ昔尼無尽藏が讀誦一徧するを聴き、便ち為に講説しき。一字一義經文に合はざること無し。乃至、汝が為に終に二説無し。」)二四b)

行昌曰、学人識量浅昧、願和尚委細開示、又如文

祖曰、汝知否、仏性若常、更説什麼善惡諸法、乃至窮劫無有下一人發菩提心者、故吾說無常、正是仏説真常之道也、又一切諸法若無常者、即物物皆有不徧之處、故吾說常者、正是仏説真無常者、即物物皆有自性、容受生死、而真常性有不徧之處、故吾說常者、正是仏説真無常義也、仏此為下凡夫外道（一二五a）執於邪常、諸二乘人於常計無常、共成八倒故、於涅槃了義教中破彼徧見、而顯說真常・真我・真淨。汝今依言背説真常真我真淨、汝今依言背義、

これもまた文の通りである。

「行昌曰、「学人識量浅昧。願和尚委細開示。」（行昌曰く、「学人が識量浅昧なり。願わくは和尚委細に開示しましませ。」）また文の通りである。

「祖曰、「汝知否。仏性若常、更説什麼善惡諸法。乃至窮劫無有下一人發菩提心者上。故心者上。故吾説無常。正是仏説真常之道也。又一切諸法若無常者、即物物皆有自性。此自性ハ劣自性也。」）容受生死。而真常性有不徧之處。故吾説常者、正是仏説真無常義也。仏此為下凡夫外道執於邪常、諸二乘人於常計無常、共成八倒故、於涅槃了義教中破彼徧見上。而顯說真常・真我・真淨。汝今依言背説真常真我真淨、汝今依言背義。」

（祖曰く、「汝知るや否や。仏性若し常ならば、更に什麼の善惡諸法をか説かん。乃至、窮劫にも一人として菩提心を發す者有ること無けん。故に吾れ無常と説く。正しく是れ仏説真常の道なり。又、一切諸法若し無常ならば、即ち物物皆自性有りへこの自性は劣つた自性である。生死を受く容し。而も真常の性は不徧の處有らん。故に吾れ常と説くは、正しく是れ仏説真無常の義なり。仏は、此れ、凡夫外道は邪常を執し、諸の二乗の人には常に於いて無常と計り、共に八倒を成すが故に、涅槃了義教の中に於いて、彼の徧見を破らんが為めに、而も顕わに真常・真我・真淨を説く。汝、今、言に依つて義に背く。」）

右所載ノ祖言ニ、汝知否、仏性若常、更説什麼善惡諸法トイフハ、無常ナラスシテ常ナルヘクハ、善惡ノ諸法アルヘカラサルユヘニ、已前ニ性ナラヌモノアルヘカラストナリ、仏ステニ衆生ヲ仏性トイフ、山河大地ヲ仏性トイフ、衆生ノ内外スナハチ仏性ノ悉有也ト云フ、勿論事也、若常トイフ両字ハ、コレ行昌カ見ニ仰テ、若常ナラハト被仰也、（一二五

「若常」という一字は、行昌の考え方負わせて、「若し常ならば」とおっしゃつ

b)

祖云、乃至窮劫無有一人發菩提心者トイフ、窮劫トハ劫ヲキハメテヒサシキタトヘナリ、

たのである。
「祖曰、乃至窮劫無レ有下一人發菩提心者上」（祖曰く、「乃至、窮劫にも一人として菩提心を發す者有ること無けん」とある。「窮劫」とは、劫を窮めて久しいたとえである。

又菩提心ヲコスモノ一人モアルマシトトカルルユヘハ、仏性無常ト云ヘハコソ菩提心ヲモヲコセ、常ニシテ不變ナラムニハヲコスト難^レ云、コノ心也、コレ發菩提心仏性ナルヘキユヘニ、凡ハ常トイフモ、無常ト云モ、仏法ニハ共ニ世間ノ詞ノ如ニハ心得マシキ事也、コノユヘニ仏性常住ト經ニハトケトモ、世間ノニイフ常ニハコトニシテ、祖言ノ無常者即仏性也ノ義ニハ通シ、常トハ云ヘトモ、世間ノ常ハ、經ニトク真常ニハコトナルヘシ、祖ハ吾說無常ハ正是仏說真常（一二六a）之道也ト被^レ仰、又吾說常ハ正是仏說真無常ノ義ナリト云々、無常モ常モ仏性ト六祖ハトカセヲハシマス、

「ここでは、全く「諸法」の方をお説きにならない。ただ「仏性」だけである。
「吾說無常」も仏性である。「仏說真常之道」も仏性である。「吾說常」（無常である）も仏性である。仏「說」の「真無常」も仏性である。真という字を加えるから仏性である。全く「有常者即一切諸法分別」のことを言わない。ここは、行昌が言うところの有常・無常を超えたときに、「有常と無常の」詞を一つにして、

事ヲハイワス、ココハ行昌ノ云フ所ノ有常無常ヲ超越シヌルトキニ、詞ヲアハセテ両方ニ心得ムトハイトナムヘカラス有常ノ方ヲハ不可知也。

祖曰、一切諸法若無常者、即物物皆有_ニ自性、容_レ（一二六b）受_ニ生死、而真常性有_ニ不徧之處、故吾說常正是仏說真無常義也トイフ、吾說常ト云テ、ココニ無ノ字ナキニハカサレテ、学者迷ナリ、吾說ト被_レ仰ハ、無常トナリ、ココニハ有常者ノ方ヲハスヘテトカサル也、コノ若無常者ト云ハ、行昌ノ見ノ無常ヲイフ、シカラハ物物皆自性アリ、生死ヲウクヘシトイフ、此自性ト云ハ非_ニ仏性、タタ物物ノミツカラヲ自性トイフユヘニ、皆生死ヲウクヘキ也、真常ニ不徧ノ處イテキヌヘシトキラハルルナリ、故ニ吾說常者正是仏說真無常ノ義也トイフ、無ノ字（一二七a）コソナケレトモ、吾說トイフユヘニ真無常ナルナリ、

である。

祖曰、仏此為下凡夫外道執ニ於邪常、諸二乘人於_レ常計ニ無常、共成ニ八倒_一故、於ニ涅槃了義教中_一破_中_レ〔彼〕徧見_上トイフ、是ハ邪執邪計ノ様ヲトカル、四顛_ノ八倒ナムト云ハ、サカサマニアシキ事ヲイフ、八倒トカソフル事ハ、外道ノ常樂我淨ト、声聞ノ苦空無常無我ト、八力フサネテ顛倒ノ法ナルユヘニ、八倒トハ云ナ

「諸法と仏性の」両方に理解しようと努めてはいけない（有常の方を知るべきではないのである）。

「祖曰、一切諸法若無常者、即物物皆有_ニ自性、容_レ受_ニ生死、而真常性有_ニ不徧之處。故吾說常者、正是仏說真無常義也」（祖曰く、「一切諸法若し無常ならば、即ち物物皆自性有り。生死を受く容し。而も真常の性は不徧の處有らん。故に吾れ常と説くは、正しく是れ仏說真無常の義なり」とある。「吾說常」とあって、ここに「無」の字がないことにたぶらかされて、学人は迷うのである。「吾說」とおっしゃられるのは、「無常」ということである。ここでは「有常者」の方は全く説かないのではある。この「若無常者」と言うのは、行昌の見解の無常を言う。そうであるならば、「物物皆有_ニ自性、容_レ受_ニ生死」である、この「自性」というのは仏性ではない。ただ「物物」のそれ 자체を「自性」というのであるから、皆な生死を受けるべきである。「真常」に「不徧之處」が出て来てしまってあろうと斥けられるのである。だから「吾說常へ無常のことである」者、正者は仏說真無常之義也」とある。無の字はないけれども、「吾說」というのであるから、「真無常」であるのである。

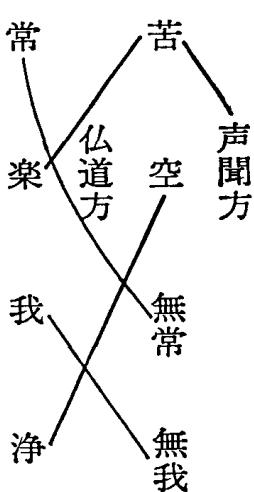
「祖曰、仏此為下凡夫外道執ニ於邪常、諸二乘人於_レ常計ニ無常、共成ニ八倒_一故、於ニ涅槃了義教中_一破_中_レ〔彼〕徧見_上トイフ、是ハ邪執邪計ノ様ヲトカル、四顛_ノ八倒ナムト云ハ、サカサマニアシキ事ヲイフ、八倒トカソフル事ハ、外道ノ常樂我淨ト、声聞ノ苦空無常無我ト、八力フサネテ顛倒ノ法ナルユヘニ、八倒トハ云ナ

リ、

外道ノ常樂我淨ト、仏ノ四徳ハラ蜜ト、文字モ員モ同シケレトモ、其意ハルカニコトナリ、語言雖^{ヨシトモ}（一二七b）^レ同、其義即異ノ文無^ニ相違、外道ノ常樂我淨ト談スルハ、皆我ヲ為レ本テ、常ト云モ樂ト云モ淨ト云モ仰レ我テ常ナリトモ樂トモ淨トモイフ、仏ハ苦道即法身ト談スレハ、声聞ノ苦ヲハ樂ト被^レ仰、常モ樂モ我モ淨モ諸法仏法ナル時節ナレハ、迷悟モナラヘテタタラナシ、悟上得悟、迷中又迷ナルヘシ、

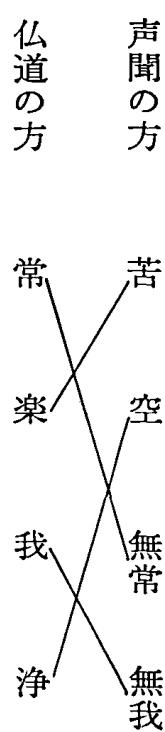
声聞ノ苦空無常無我トトクハ、皆三男ヲ為レ本テ、是ヲイトハセムタメニトク、仏ノ四徳ハラ蜜ト通シテ被^レ破^{ヤフ}様如^レ此也、（一二八a）

るから、「八倒」と言うのである。
「外道の常・樂・我・淨と、仏の四徳波羅蜜と、文字も數も同じであるが、その意ははるかに異なつてゐる。「語言雖^{ヨシトモ}同、其義即異」（語言同じと雖も、其の義即ち異なる）の文句は相違ない。外道が常・樂・我・淨と説くのは、皆、我を本として「いるのである」。常と言うのも、樂と言うのも、淨と言うのも、我に負わせて常であるとも、樂とも、淨とも言ふのである。仏は「苦道即法身」と説くので、声聞の苦を樂とおっしゃる。常も樂も我も淨も、諸法仏法なる時節「の常・樂・我・淨」であるから、迷悟も並べて、ただ同じである。悟上得悟・迷中又迷であるはずである。



四諦法
苦集滅道

祖曰、而顯^{アラハ}真常真我真淨トイフ、真常ノ事
コソ此段ノ談ナレ、我ト淨トハ何事ニ出キタ



四諦の法
苦・集・滅・道

「祖曰、而顯^{アラハ}〔說〕真常真我真淨」（祖曰く、「而も顯わに真常・真我・真淨を説く」）とある。「真常」のことこそ、この段が説くことである。我と淨とは、どうした

ルソト覚タレトモ、凡夫外道執諸三乘人邪計トモニ成^ニ八倒^トトイヒツル時ニ、（一二八b）八倒ノ詞ニツキテ我ト浄トハイテクル也、

仮性ノ語ニヨリテ常無常ノ義ヲ判^ス、六祖ノ御念ハ、抱^ステ外道二乗ノ邪計ヲノソカムカ為ナルニヘニ、真常・真淨トアル也、

^{*\}疑者曰、若然者何ソ真樂トイハサル、答曰、誠ニシカリ、タタ覽略^レ之歟、常我淨ノ三カ真ナラム上ハ、真樂ノ義不^レ可^レ闕者哉、

祖曰、汝今依言背義トイフ、是ハ行昌ヲ被^レ非御詞也、ココマテハ六祖与^ニ行昌^ニ問答ノ御詞ヲアカス、（一二九a）

抑[\]祖師御詞ニ吾伝仏心印^{イシシキニ}安^敢違^ニ於^レ仏經^ニヤトアリ、近代禪僧多我法ハ仏ノ心印ヲツタヘマシマス法ナレハ、不^レ可^レ依^ニ經教[、]言語ヲ不^レ可用トイフ、今ノ祖言ニハ甚違スヘシ、

ヲノレカ經文ヲアシク心得、祖言ヲ心得ネハトテ仏經ヲシステムコトハ、六祖ノ御詞ニ違ス、又祖師ノ言句ヲ心得スシテ、コレニ義ヲ不^レ可^レ云ト云モ、イタツラニ、ウタカヒ居タレトヲシフルコト心得ラレス、モシソレ如^レ此ナラハ、前代ノ祖師上堂入室何ノレウソ、又前

ことで出て来たのかと思われるけれども、「凡夫外道」の「執」と「諸二乘人」の「計」とが、共に八倒を成す（共成八倒）と言つたときに、「八倒」のことばに関連して、我と浄とは出て来たのである。

へ仮性の語によつて、常・無常の意味を判断する。六祖のお考えは、すべて外道二乗の邪計を除こうとするためであるから、真常・真淨とあるのである。

へ疑う者が言うのに、「もしそうであるならば、どうして真樂と言わないのである？」と。答えて言うのに、「本当にその通りである。ただ仮りにこれを略したのか。常・我・淨の三つが真である上は、實に真樂の意味は欠くことができないものである」と。

へ「祖曰、汝今依^レ言背^レ義」（祖曰く、「汝、今、言に依つて義に背く」とある。これは、行昌を非難されたおことばである。ここまででは、六祖と行昌との問答のおことばを説明した。

へところで、祖師のおことばに「吾伝^ニ仏心印^一安^敢違^ニ於^レ仏經^ニ」（吾れ仏心印を伝う。安んぞ敢えて仏經に違わん）とある。近頃の禪僧の多くは、「私の法は、仏が心印をお伝えになる法であるから、經教によるべきではない。言語を用いるべきではない」と言う。今の祖師のことばには、大そう相違していよう。自分が經文を誤つて理解し、祖師のことばを理解しないで仏經を捨てようとすることは、六祖のおことばにそむく。また、祖師の言句を理解しないで、これに對して考えを言うべきでないと言うことも、むだに疑つておれと教えることも理解できない。もしそうであるならば、前代の祖師の「行なつた」上堂・入室は何のためか。また、前代の祖師のことばをあげて頌古・拈古し、下語・説道理することは、こ

代祖師ノ言ヲ擧シテ（一二九b）頌古拈古シ
下語説道理スル、又何ノレウソ、タタシ上堂
入室ノコトハモ不_レ被_ニ心得_一、下語説道理ノ心
モシラレネハトテ、義ナシト云事返返ヲカシ
キ事也、如_レ此イフヤカラ、義ヲアケ理ヲツ
クス経説ヲモ不_レ可_ニ心得_一、詞ヲヤハラケ理ヲ
クタキテカカレタル仮名ノ書籍ヲモココロヘ
サレハトテ、ヒタヒニカケテ居タルヘキカ、
涅槃經吾昔者聴ニ尼無尽藏讀誦一徧便為講説無
一字一義不合經文乃至為汝終無二説ト被_レ仰
テ、仏經ニハ仏性是常ナ（一三〇a）リトト
クヲ、祖ハ無常即仏性也ト被_レ仰、タトヘハ
義ノ通シテカハサラムコトハサモアレ、一
字經文ニアハサルコトナシトハイカテ被_レ仰
哉、尤不審也、但吾説無常者、正是仏説真常
之道也トアルハ、真常トアルソ無常ヨ、ユヘ
ニ仏性也、吾説常ハ正是仏説真無常之義也ト
アル、常ハ有常ノ方ノ常ニモアラス、無常仏
性也、仏説モ又真無常ト云テ、真ノ字ヲ加ヘ
ヌルトキニ仏性トナリ、ココニハ仏性ノミヲ
アカシテ、更有常者即善惡一切諸法分別心也
ノ事ヲハトカス、（一三〇b）無沙汰ノ上ハ
勿論也、如_レ此ナル故、一字モ經文ニアハサ
ル事ナシト被_レ仰也、只常無常ノ文字ノ替_ヲ
トカル、

れもまた何のためか。もつとも、上堂・入室のことばも理解できず、下語・説道理のわけも知らないのに、意味がないということは、何度考えてもおかしいことである。このように言う族は、教義をあげ、道理をつくす経説をも理解できない。ことばをくだいて表現し、理をつくして書かれた仮名の書籍も理解しないからと言つて、「公案を」額にかけているべきであろうか。

「涅槃經吾昔者聴ニ尼無尽藏讀誦一徧、便為講説。無ニ一字一義不_レ合_ニ經文。」乃至為_レ汝終無ニ「説」（涅槃經は、吾れ昔ニ無尽藏が讀誦一徧するを聴きて、便ち為に講説しき。一字一義經文に合はざること無し。乃至、汝が為に終ニ「説無し」とおつしやられて、仏經では「仏性是常也」と説くのを、六祖は「無常即仏性也」とおつしゃられた。仮に、意味が通じて違わないことはともかく、一字も經文に合わないことがないということは、どうしておつしやることができるのであるのか。本当に疑問である。しかしながら、「吾説ニ無常者、正是仏説真常之道也」（吾れ無常と説くは、正しく是れ仏説真常の道なり）とあるのは、「真常」とあるのが「無常」だから仏性である。「吾説ニ常者、正是仏説真無常之義也」（吾れ常と説くは、正しく是れ仏説真無常の義なり）とある。「常」は「有常」の方の常でもない。無常が仏性である。仏説もまた「真無常」と言つて、真の字を加えたときに仏性と言うのである。ここでは仏性のみを明らかにして、全く「有常者即善惡一切諸法分別心也」のことを説かない。とりあげて論じない以上は、論じるまでもない。このようであるから、一字も經文に合わないことがないとおつしやられるのである。ただ、常と無常の文字が入れ替わるのを説かれたのである。

マコトニ是等ノ道理ヲ思ニ、仏經ヲ見ニ邪正アリ、祖師ノ詞何ソ知不知ノ人ナカラム、ツタヘテ知ル人ハマレナルヘシ、クラクシテ不知ル人ハ多カルヘシ、不知ノ人ハウタカフヘシ、知ル人ハアキラムヘシ、コノ道理ヨクヨク功夫シテ、努力闇人ノ教ニ隨事ナカレ、

此門ニハ言語ニヨラス文字ヲタテスト云フ、サレハトテ詞モアルマシ、經教モナシト非可云、西天ヨリ(一三一-a)經教震旦ニワタルト云ハ、梵字ヲ漢字ニ翻訳シテコソ渡セハ、我翻訳ノ經ヲヤカテ依經トスル事アタラネハ、必何ノ經ニヨルトイハス、仏迦葉ニ伝法シマシマシシトキ、イツレノ經教ヲ付屬ストミエス、只吾有正法眼藏付屬摩訶迦葉ト被仰ヌルトキニ、諸教フサネテ正伝ストイフヘキカ、或又以心伝心ト云フ、心ヲ伝フル也ト心得ル方モアレトモ、心トハ又何ヲ定ムヘキソ、イタツラナル凡夫ノ慮知ノ心ヲツタエテハ、有何詮哉、只一仏乘ヲ伝ト心得ヘシ、於一仏乘分別說三ト云、諸(一三一-b)乘一仏乗ト皆会スル是仏ノ本意ナレハ、諸教ハ正法眼藏ニ摄スヘキカニヘニ、不^レ用^ニ言語^一トイヘハトテ、文字ヲステムコト無謂、小乘ニモ言語不及ト云フ、仏教ニハ言語道断ト云フ、言

へまことに、これらの道理を思い、仏經を見るときに、邪正がある。祖師のことばを、どうして知る人や知らない人がいないであろう。「知る人も知らない人もいる。祖師のことばを」伝えて知る人はまれであろう。わからなくて知らない人は多いはずである。知らない人は疑うべきである。知っている人は明らかにすべきである。この道理をよくよく考えて、決して闇人の教に随つてはいけない。

へこの禪門では、「言語に依らず、文字を立てず」（不依言語、不立文字）と言う。そうだからと言って、ことばもあつてはならない、經教もないと言うべきではない。インドより經教が中国に渡来するというのは、サンスクリットの文字を漢字に翻訳してもたらすので、我々が翻訳の經をそのまま依りどころとなる經とすることは道理にかなわないから、必ずしも何の經に依るとは言わない。仏が摩訶訶葉に伝法されたとき、どの經典の教を付属すと記されてはいない。ただ「吾有正法眼藏、付^ニ屬摩訶迦葉」（吾に正法眼藏有り、摩訶迦葉に付属す）とおっしゃったときに、諸教をまとめて正伝すると言うべきであろうか。或いはまた、「以心伝心」と言う。心を伝えるのであると理解する方法もあるけれども、心とは、何を「心と」決めるべきか。役に立たない凡夫の慮知心を伝えて、何の効果があろうか。ただ一仏乗を伝えると理解すべきである。「於^ニ一仏乘、分別說⁽¹⁹⁾三」（一仏乘に於て、分別して三と説けり）と言う。諸乗を一仏乗として統合するのが仏の本意であるので、諸教は正法眼藏に摂めるべきであるから、言語を用いないと言うので言って、文字を捨てることは理由がない。小乗でも「言語不及」と言う。仏教では「言語道断⁽²⁰⁾」と言う。「言語不及」と言うことも、言語で聞くのであるから、決して世間で用いる「言語」と理解してはいけない。すべて常・無常を理

語不及ト云モ言語ニテコソキケハ、摠テ世間ノ言語ト不可ニ心得、都常無常ヲ心得事尤六

祖与「行昌」ノ問答ニアリ、

依經解義三世仏怨、離經一字如「同魔說」ト云、
依詞判義頗當三世仏怨歟、經教ノ詞モ
ステス、コトハニヨリテ判義マテモナキハ、
今ノ（一三二-a）悉有仏性ノ義ナルヘシ、

「依經解義」というのは、「一切衆生悉有仏性、如來常住無有貳易」の文に関して、世間に理解するのは、「一切衆生に仏性が具わっていないことはない。かりに十界が相互に具わっていると説くのもこの意味である。衆生の側は、業力によって十界が相互に具わっていると説くのもこの意味である。衆生の側は、業力によつて果報を感じる身であるから、どのようにでもなるけれども、仏性は常住であつて貳易がない」と思い、「欲知仏性義、当觀時節因縁。時節若至、仏性現前」などという経文を、「仏性を知ろうと思うならば」（欲知仏性義）と願い求めさせたあと、その様を説くときに、「当觀時節因縁」と言つて、「時節を観じ続けているべきである。時節さえ至つたならば、仏性は現前するはずである」と、今後を待つように理解している。思うに、「このような理解の仕方を」「三世仏怨」とも言うべきであろうか。わからない。

依經解義ト云ハ、一切衆生悉有仏性、如來常住無有貳易ノ文ニ付テ世間ニ心得ハ、一切衆生ニ仏性無_レ不_レ具足_レ、且_レ十界互具ト談スルモ此心地也、衆生ノ面_カソ業力所感ノ身ナレハ、トモカクモナレトモ、仏性ハ常住ニシテ無_レ貳易_レト思ヒ、欲知仏性義、当觀時節因縁、時節若至、仏性現前ナムトイフ經文ヲモ、仏性ヲシラムトモハハトネカハセテノチ、其様ヲ説ニ、當觀時節因縁トテ、時節ヲ觀シ居タルヘシ、時節タニイタリナハ、仏性ハ現前ス（一三二-b）ヘシト、向後ヲ待様ニ心得タリ、恐ハ三世仏怨トモヤ云ヘカラム、難_レ知、

解することは、特に六祖と行昌との問答にある。

「不離經一字」（経の一字を離れず）によつて仏法を理解しようとする様子は、「一切衆生悉有仏性」の意味も、この仏性の卷で説くように、悉有を衆生とも仏性と生トモ仏性トモ心得、欲知ヲヤカテ仏性ト談も理解し、欲知をそのまま仏性と説くのである。若至若不至の時節も仏性と理解

也、若至若不至ノ時節モ仏性トコソ心得トキニ、経ノ一字モ離レズ、一仏乗ノ義モ落居スル也、詞ニ^{スル}離礙セラルトキハ、一代ノ教ノ判シテ、或ハ三藏教ニアテ、或通教ト定メ、或別教トタテ、或円教ト云フ、円以前ノ詞ハ頗^{スコブル}スツルニ似タリ、コレヲヤ離經一字トイフヘ（一三三a）カラム、シカラハ又如同魔説ノ義モノカレカタシ、

二乘外道ノ鼻祖鼻末、ソレ無常ナリト云ヘトモ云云、此祖ハ祖師ノ祖ニハアラス、初ト可ニ心得、末ニ対ス、

\無常ノミツカラ無常ヲ説著行著⁽²²⁾証著セムハ、皆無常ナルヘシト云ハ、コレ有ニ⁽²²⁾対シタル無ニアラサル事ヲ、ミツカラ説著⁽²²⁾行著⁽²²⁾証著スルナリトハ云ハル也、只無常ト許云マテハ、邪正ニハタリテキコエヌヘキヲ、ミツカラト云トキ、無常体脱也、真無常ト云詞モ脱落スル也、（一三三b）

「二乘外道の鼻祖鼻末、それ無常なりといへども」とある。この「祖」は祖の祖ではない。「初」と理解すべきである。「末」に対している。

「無常のみづから無常を説著・行著・証著せむは、みな無常なるべし」というのは、これは、有に対した無ではないことを、「みづから……説著・行著・証著するなり」と言わるのである。ただ「無常」とのみ言うだけで、邪正については十分であるとわかるはずであるが、「みづから」と言うとき、無常そのものにとらわれなくなるのである。真無常ということばにもとらわれなくなるのである。

今以現自身得度者、即現自身而為説法也ト云ハ、有ニ対セサル無ノ説著行著証著スルヲ、自身而為説法ナリト云也、

六祖道取⁽²³⁾スル無常者仏性也ト云下ニハ、有常者善惡一切諸法分別心

するときに、経の一字も離れないで、一仏乗の意味も確定するのである。ことばにさまたげられるときは、「仏の」一代の教のことばを判別して、もしくは三藏教にあて、もしくは通教と定め、もしくは別教とたて、もしくは円教と言う。「このように、化法四教を立てるることは」円教以前のことばは、はなはだ無用のものとして捨てるのに同じである。これを「離經一字」と言うべきであろうか。そうであるならば、また「如同魔説」の意味ものがれることは難しい。

者未転トアルニ、学者マトフ、シツカニ見ハ、常者ヲ未転トイハム、何ノ疑カアラム、但無常ニ邪正ノ二ノ義アリ、常ニ真邪ニアリ、然者未転モ邪正アルヘシト心得テ可ニ了見也、

\六祖道取ス、無常者仏性也、常者未転也トイ（一三四a）フ、未転ハ有常者即善惡一切諸法分別心也ノ詞ニアテテ未転ト見ヘタレトモ、次ノ詞ニ未転ト云ハトテ、タトヒトアル未転ハ正未転ナルヘシ、サレハコソ去來ノ蹤跡ニカカハレス、ユヘニ常ナリトハアレ、此常ハ無常也、真常也、仏性也、シカアレハトヲキテ、草木叢林、人物身心、國土山河、阿耨多羅三藐三菩提無常也、仏性也ト釈ル也、タタ一方ニ未転ナレハ、常ソト許ハ物念^{ブンダ}ニ不可ニ心得、

「六祖道取す、無常者仏性也、常者未転なり」とある。「未転」は「有常者即善惡一切諸法分別心也」のことばに當てて「未転」と思われてゐるけれども、次のことばに「未転といふは」と言つて、「たとひ」とある「未転」は正未転である。そうであるから、「去來の蹤跡にかかはれず。ゆへに常なり」とある。この「常」は無常である。真常である。仏性である。「しかあれば」として、「草木叢林」「人物身心」「國土山河」「阿耨多羅三藐三菩提」は「無常なり」「仏性なり」と釈かれるのである。ただ一方で「未転」であるから、常とばかり輕率に理解してはいけない。

\未転ト云ニ付テ、教家ノ談ニモ正見邪見ワカレタリ、此宗門ニモ正見邪見アルヘシ、（一三四b）

正見ト云ハ是宗門ノ義也、

\凡ヲ転シテ聖トナリ、是ハ転スレハ真常ノ方也、非邪凡ヲ転セスシテ聖トナリ、同上無常見也、凡ヲ転セス聖トナラス、是ハ凡ノ方モ聖ノカタモ転スト云詞ナケレハ、邪常ノ方トモ云ツ

「常者」を「未転」と言うのだろう。どんな疑いがあろう。しかしながら、無常に邪正の二つの意味がある。常に真邪の二つがある。そうであるから、「未転」にも邪正があるはずであると理解して、考えるべきである。

「未転」と言うことに関するして、教家の説にも正見と邪見が分かれている。この宗門にも正見と邪見があるはずである。

「正見」というのは、宗門の義である。

「凡を転じて聖となり、これは、転じるので真無常の方である。邪ではない」
「凡を転じないで聖となり、上に同じく無常の見である」
「凡を転じないし、聖とならない。これは、凡の方も聖の方も転じるということ
ばがないので、邪常の方とも言えるであろうが、すでに、転・未転をも、凡聖を

ヘケレトモ、ステニ転未転ヲ超越スト云モ凡聖ヲモ超越シヌルトキニ、正見ノ方ニハ取ナリ、

疑曰、抑凡聖転未転ヲ超越スト云ヘトモ、其証拠何事歟、

答曰、此難尤似^レ有^レ謂、然而超越脱落ト云上、不^レ（一三五a）可^レ及^ニ子細^{、且^レ}^又亘古亘今ナムト云詞モ、古ト云フトキハ三世共古トツカヒ、今ト云時ハ三世イマトモイフ、又古今ナキ所ヲ亘古亘今トハイフトモ心得ヘシ、又仏界衆生界ノ増減トテ宗門⁽²⁵⁾ノ大事トモテアツカヘトモ、仏衆生ヲ各別スル時コソ一方増スレハ一方減スル道理ナクテモエナケレ⁽²⁶⁾、生仏一如と「いうように、如ト脱体シヌレハ、増減ヲモマトハヌ也、今ノ転ノ字モ是程ニ可ニ心得」

も超越したときなので、正見の方に取るのである。

「へ疑つて言つた。」

「そもそも、凡聖、転未転を超越すると言つても、その証処はどうなことか。」

「へ答えて言つた。「この非難は、いかにも理由があるよう見える。そうではあるが、超越脱落と言うからには、こまかいわけに立ち至るべきではない。また、亘古亘今などと言うことばも、古というときは三世をともに古とつかい、今と言うときは三世を今とも言う。また、古今がないところを、亘古亘今と言うとも理解すべきである。また、仏界・衆生界の増減と言つて、宗門の大事として大切に取り扱うけれども、仏と衆生をそれぞれ別なものとするとき、一方が増せば一方が減る道理がなくとも、ないということにはならない。生仏一如と「いうように、衆生と仏とに」とらわれなくなつて（体脱して）しまうと、増減をも惑わないのである。この「転」の字も、この体脱くらいに理解すべきである。」

邪見ト云ハ、宗門ニスツル義ナリ、

凡ナルモノハ常ニ凡ナリ、凡イマタ聖ト転セス、聖イマタ凡ト転セス、^{是等ハ皆不転ニシテ常トイ}フヘシ^{邪見ノ未転ナリ、}

（一三五b）

「へ邪見と言つたのは、宗門で捨てる考え方である。

「へ凡である者は常に凡である。凡是まだ聖と転じていない。聖はまだ凡と転じてい

いない。」

「へこれらは皆不転であつて、常と言つべきである。邪見の「未転」である。」

「未転ト云ハタヒ能^{ダシ}断ト変ストモ、所断ト化ストモ文、能断ハ仏性也、所断ハ有常者ナリ、シカルヲ去來ノ蹤跡ニカカワレサレハ、未転ト心得ル是真常也^{無常ト可ニ心得、真常ハ無常也}、未転ノ様如^レ此、未転ト

云へハトテ、常トコソイハメト心得ル邪ノ方
ナルヘシ、

うのがよいと理解するのは邪の方であろう。

此能断所断ノ詞似^レ無^レ詮、其故ハ端ニ常凡コ⁽²⁷⁾
レ無常也、常聖コレ無常也ト云詞アルトキニ、
常ノ字ハアレトモ無常也、無常也トツケテ仏
性トルユヘニ、シハラク能断所断ノ詞アレ
トモ、タトヒトユルス許也、必変ストモ化ス
トモナシ、蹤跡ニカカハレス、ユヘニ常也ト
被^ケ結、コノ常ハ(一三六a)六祖ノ真常ナレ
ハ、無常ト可ニ心得、未転トアレハ、ツネナ
リト心得テ、常ト談スルハウタタ仏法ニトヲ
シ、未転ノ詞ハ不会程ニ可ニ心得^一也、

\常ハ仏見邪見二アルユヘニ、六祖ハワカト
クト云詞ヲツカハセ御ス、コレ仏見也、此段ニ^{仏性第六段事也}
ハ二心ナリ、無常ヲ仏性ノ方ニツケ、有常ヲ
分別心ノ方ニ心得ルカ正嫡ナルヲ、僻^{*}見ノ学
者有常無常ワクヘカラス、唯一仏性トコソ談
セメナムトイフ甚迷也、仏法ノ大スカタヲス
テスシテ、シハラク能所ヲ断ヲカレタルヤ
ウナレトモ、去來ノ蹤跡ニカカハレス(一三
六b)トアル上ハ、未転ハ無常ト心得ナリ
スヘテ有⁽²⁸⁾常沙汰ナシ、今有常トアル
モ真有常也、仏ノ無常ニアタル、去來ノ蹤跡ニ非ス、
ユヘニ常也ト被^ケ結、此常ハ真常也、無常也、
仍仏性也、

への「能断」「所断」のことばは、無意味に思われる。そのわけは、はじめの部分に「常聖これ無常なり。常凡これ無常なり」と言うことばがあるときに、「常聖・常凡と」常の字はあるけれども無常である。「無常なり」と示して仏性とするのであるから、仮りに「能断」「所断」のことばがあつても、「たどひ」とゆるすだけである。必ず「變ず」とも「化す」とも「言わ」ない。「蹤跡にかかはれず、ゆへに常なり」と結ばれる。この「常」は六祖の真常であるから、無常と理解すべきである。「未転」とあるので、つねであると理解して、「常」と説くのは、ますます仏法に遠い。「未転」のことばは、不会くらいに理解すべきである。

「無常」は、仏見・邪見の一いつがあるから、六祖は、「吾が説く」(吾説)といふことばをおつかいなさる。これは仏見である。この段(仏性第六段のことである)^{ハ二心}では二心である。「無常」を「仏性」の方につけ、「有常」を「分別心」の方に理解するのが正統的理解であるのに、かたよつた見方をする修行者が、「有常と無常を分けるべきではない。ただ一仏性だけであると説こう」などというのは、全く迷いである。仏法の広大な様子を捨てないで、仮りに能所を断じることを休まされたようであるけれども、「去來の蹤跡にかかはれず」とあるからには、「未転」は「無常」と理解するのである(全く「有常」についての論義はない。ここに「有常」とあるのも真有常である。仏の無常に相当する)。「去來の蹤跡」ではない、「ゆへに常なり」と結ばれる。この「常」は真常である。「無常」である。その上「仏性」である。

凡ハ無常仮性ノ義詞ヲ尽テ被釈、然而有常者即善惡一切諸法分別心也ノ方ハ、其詞ナキ様也、但一一ニ此義ノアラハルルユヘハ、草木叢林人物身心山河大地阿耨多羅三藐三菩提大般涅槃マテ字ノ下ニ皆無常ノ詞ヲカルレハ、分別心ノ義モアラハルルニテコソアレ、無常トツカサラムハ皆分別心ノ方ナルヘシ、

\魔外ト云ハ天魔ノ魔、外道ノ外ノ字トヲ（一三七a）引合テイフナリ、仮性義ヲ驚疑怖畏スヘキ類ナリ、（一三七b）

(1) 『景德伝燈錄』卷五 江西志徹章からの引用である。『聞書』ではこの前後も引いて註釈しているから、その箇所も含めて次に示すことにする。問答であるからそれぞれ改行し、返り点は原則として『聞書』に依り、一部改めた。なお、『聞書』との文字の違いを後に註記した。

曰、（中略）弟子嘗覽涅槃經、未曉常無常義。乞和尚慈悲略為宣說。

祖曰、無常者即仮性也。有常者即善惡一切諸法分別心也。

曰、和尚所說大違經文也。

祖曰、吾傳仮心印。安敢違於仮經。

曰、經說仮性是常、和尚却言無常。善惡諸法乃至菩提心皆是無常、和尚却言是常。此即相違。令學人転加疑惑。

祖曰、涅槃經吾昔者聽尼無尽藏讀誦一遍、便為講說、無一字一義不合經文。乃至為汝終無二說。

曰、學人識量淺昧。願和尚委曲開示。

祖曰、汝知否、仮性若常、更說什麼善惡諸法。乃至窮劫無^①有一人發菩提心者。故吾說無常、正是仮說真常之道也。又一切諸法若無常者、即物物皆有^②自性。容受^③生死、而真常性有^④不遍之處。故吾說常者、正是仮說真無常義也。仮比為^⑤凡夫外道執^⑥於邪常、諸二乘人於常計無常、共成^⑦八倒^⑧故、於涅槃了義教中^⑨破^⑩彼偏見^⑪、而顯說^⑫真常真我真淨。汝今依^⑬言背^⑭義。（正藏五一・二

へすべて、無常仮性の意味が、ことばをつくして釈かれる。そうではあるが、「有常者即善惡一切諸法分別心也」の方は、その「釈かれた」ことばがないようである。しかしながら、それぞれにこの意味があらわれるわけは、「草木叢林」「人物身心」「山河大地」「阿耨多羅三藐三菩提」「大般涅槃」まで、字の下に皆「無常」のことばを置かれるので、「分別心」の意味もあらわれるるのである。「無常」につかないならば、皆「分別心」の方であろう。

「魔外」と言うのは、天魔の「魔」と、外道の「外」の字とを引き合わせて言うのである。仮性の意味を「驚疑怖畏」するはずの「類」である。

三九 a)

①通一篇 ②曲一細 ③比一此 ④偏一篇

- (2) 『全集』は「ふと」とするが、『抄』(一一九b)『聞書』(一三三b)によつて「へど」と改めた。
- (3) 『全集』は「ん」とするが、『抄』(一一〇a)によつて「む」と改めた。
- (4) 『全集』は「ん」とするが、『抄』(一一一a)によつて「愚」と改めた。
- (5) 『全集』は「愚見」とするが、『抄』(一一一a)によつて「愚」を除いた。
- (6) 『全集』は「これ仏性」とするが、『抄』(一一一b)によつて「これ」を除いた。
- (7) 『景德伝燈錄』卷五 江西志徹章
- 祖曰、汝今徹也。宣名志徹。(正藏五一・二三九a)
- (8) 『妙法蓮華經』卷七 観世音菩薩普門品第二五では、觀世音菩薩が三三身に身を現じて衆生を度すことを、次のように述べている。
応下以_二仏身_一得度_上者、觀世音菩薩、即現_二仏身_一而為說_レ法。応下以_二辟支佛身_一得度_上者、即現_二辟支佛身_一而為說_レ法。応下以_二声聞身_一得度_上者、即現_二声聞身_一而為說_レ法。(下略)(正藏九・五七a～b)
- 「今以_二現_一自身_一得度者、即現_二自身_一而為說_レ法」は、これをふまえて説いたものである。六祖が「無常即仏性」と説いたのであるが、それは、無常なる六祖が無常（仏性）を説いたのであるから、無常自からが無常を現じ、無常を説いている（説著）と言うことができる。同様に、無常自からが無常を行じ（行著）、証する（証著）のである。
- (9) 「或以現長法身得度者、即現長法身而為說法。或以現短法身得度者、即現短法身而為說法」を略したものと考えられる。長も短も仏性の上の長短であつて、皆仏性である。
- (10) 『景德伝燈錄』卷五 江西志徹章の始めの箇所を要約して述べたものであろう。
- 江西志徹禪師者江西人也。姓張氏、名行昌。少任俠。自南北分_レ化、二宗主雖_レ亡_二彼我_一、而徒侶競起_二愛憎_一。時北宗門人、自立_二秀師_一為第六祖、而忌_レ能大師伝衣為天下所_レ聞。然祖是菩薩。預知其事、即置金十両於方丈。時行昌受北宗門人之囑、懷刃入_二祖室_一、將欲_レ加害。祖舒_レ頸而就。行昌揮_レ刃者三、都無_レ所_レ損。祖曰、正劍不_レ邪、邪劍不_レ正。只負_二汝金_一不_レ負_二汝命_一。行昌驚伏、久而方甦。求哀悔_レ過即願_二出家_一。祖遂與_レ金云、汝且去。恐_二徒衆翻害_一於汝。汝可_二他日易_レ形而來。吾當_二接受_一。行昌稟_レ旨宵遁、終投_レ僧出家_二戒精進_一。一日憶_二祖之言_一、遠來礼覲。(下略)(正藏五一・二三八c)
- この後に、註(1)に引いた六祖と行昌との問答が続く。
- (11) 泉福寺本には「奉」と思われる字が書かれており、左に「奉」、右に「煞」とある。しかし「煞」は朱点で抹消されているようであ

り、次には「行昌刃ヲノヘテ忽欲奉害時」とあることから、「奉」を採った。なお、玉林寺本・寛政五年写本（駒沢大学所蔵）は、「煞」を受けて「殺」とする。

(12) 泉福寺本には「死」とも「形」とも読める字が書かれており、左に「死」、右に「カタ」とあり、「カタ」は朱点で抹消されているようであるから、「死」を採つた。しかし、総持寺本・玉林寺本・寛政五年写本は「形」としている。

(13) 以下の『聞書』中に見られる六祖と行昌との問答は、『景德伝燈錄』卷五 江西志徹章よりの引用である。註(1)参照。

(14) 第三段の「山河を見るは仮性を見るなり。仮性を見るは驢腮馬觜を見るなり」とあるのであって、ここでは「仮性也」とあって、「仮性ヲミル也」とはないから、「驢腮馬觜ヲミル」の「ヲミル」は削除すべきであろう。訳では除いた。

(15) 「經文に違すなり」とは、六祖が「無常者即仮性也、有常者即善惡一切諸法分別心也」と説いたのは、『大般涅槃經』で、
仮性常恒無レ有ニ變易。(卷二七 師子吼菩薩品第一 正藏一二・五二三b)

如來為ニ有為法故說ニ無常。(卷三五 迦葉菩薩品第一二 正藏一二・五七一a)

などと説くのと違うということを指す。

(16) 総持寺本も「タリ」であるが、玉林寺本・寛政五年写本・万福寺本（『蒐成』二一・二五b）には「アリ」とある。「アリ」が正しいと思われるから、訳文は「アリ」として訳した。

(17) 『宗門聯燈会要』卷三 江西志徹章（続藏一三六・二三九b）では、『景德伝燈錄』と同文の門答を収めているが、そこには「真樂」がある。

(18) 拙稿『正法眼藏抄』に見られる「近代の禪僧」批判（『印度学仏教学研究』第二九卷一号 昭和五五年一二月、一九五〇一九八頁）参照。

(19) 『妙法蓮華經』卷一 方便品第二（正藏九・七b）、卷二 譬喻品第三（同・一三c）、卷四 化城喻品第七（同・二六a）

(20) 『維摩詰所說経』卷下 見阿闍陀品第一二

(前略) 不來不去、不出不入、一切言語道斷。(正藏一四・五五五a)

『妙法蓮華經』卷九 安樂行品第一四

復次菩薩摩訶薩、觀一切法空、如實相、不顛倒、不動、不退、不転、如虛空無所有性、一切言語道斷、不出、不生、不滅、（中略）無障。(正藏九・三七b)

その他、『中論』卷三 觀法品第一八（正藏三〇・二五b）にも見られる。

(21) 『景德伝燈錄』卷六 百丈懷海章

問、依經解義三世仏怨、離經一字一如同魔說如何。師云、固守動用三世仏怨、此外別求即同魔說。(正藏五一・一五〇a)

(22) 「者」とあつたが、「著」の誤りであるから訂正した。

(23) 「スル」とあるが、『抄』(一一一a) 及び次の合点印の『聞書』には「ス」とあるから、訳では「す」と改めた。

(24) 「同上」は割註とすべきではないであろうか。訳ではそのように扱つた。なお万福寺本(『蒐成』一一一・一九c)は「同上」を削除している。

(25) 「宗・ノ大事」とあり、傍註として「門入歟」とある。玉林寺本・寛政五年写本・万福寺本(『蒐成』一一一・一九c)は、この註に依つて「宗門」としているが、総持寺本はこの註に依らない。前後に「宗門ノ義」「宗門ニスツル義」という語句もあるから、「門」を入れて「宗門」と改めた。

(26) 「ケレ」とあるのを、「ラネ歟」と誰かが傍註を付けている。玉林寺本・寛政五年写本・万福寺本(『蒐成』一一一・一九d)は、これに従つて改めているが、「歟」までも本文中に入れ、「……道理ナクテモエナラネ歟」としている。ここでは総持寺も採つている「ケレ」とし、改めなかつた。

(27) 傍註として「論歟」とある。玉林寺本・寛政五年写本・万福寺本(『蒐成』一一一・三〇a)は、この註によつて「論」としているが、総持寺本は「端」とする。「端」又は「論」にどのようなことばがあるかというと、「常凡コレ無常也、常聖コレ無常也」であり、前後が入れ替つてゐるが、これはこの本文の「常聖これ無常なり、常凡これ無常なり」を指してゐると言えるから、「論」ではなく「端」が適當と考え、改めなかつた。

(28) 「有情」とあつたが、ここには載せなかつた頭註に「情ノ字常ナルヘシ」とあるように、「有常」とすべきであるから訂正した。

(29) 「槃」とあつたが、「般」の誤りであるから訂正した。

(一九八六・七・六)